少女の周りにはたくさんの花があふれている
彼女は母に、となりの友達に、
赤いお花をプレゼントする
皆がよろこぶ顔がうれしい

お花はイラクの院内学級から
海を越えて日本にやってきた
チョコと一緒に
日本の友達に手渡される

薬もなく、水や電気も途絶えがちな小さな街
ハウラちゃんは、遠い病院にいくことも困難だ
でも、お花を手に笑顔が広がっていく
描いたお花は、少女のいのち

ＪＣＦイラク支援

セントラル小児教育病院医師とＪＣＦが支援した血液成分分析機

バグダッドは治安の悪化で、医師も逃げ出してしまった。しかし、踏みとどまった医師たちは、治療を再開した。子どもたちの出血死が改善されていく。Dr. ジャファーは、自らドナーになっている。JCF は、キットの支援を継続していくつもりだ。

グランドゼロ GROUND ZERO JCF 78冬

目　次

ＪＣＦイラク支援
難民キャンプのパレスチナ人＜国井真波＞ 6
イラク戦争とパレスチナ難民＜加藤丈典＞ 12

プラハの春
プラハの春 ＜鎌田實＞ 20
チャリティコンサート「ふるさと」 29
ナジェージダ 2008 30

JIM-NET 活動報告
現地の人々の将来の生活のための援助を！ ＜大嶋愛＞ 32
第 8 回 JIM-NET 医療会議 イスタンブールで開催 36
限りなき義理の愛大作戦 09 が始まります 38

連載＆お知らせ
ベラルーシの食卓 42
モスクワ便り 43
連載随筆「他者と出会う」 ＜宮尾彰＞ 44
ロシア小話 46
振替用紙のメッセージから 48
ありがとうございました！ 50
出会い　Встреча 52
Здравствуйте！（事務局広場） 60
カルチャーレビュー 62
インフォメーション 66

表紙写真提供：マキシム・ニコラエフ

難民キャンプのパレスチナ人

国井　真波

アル・ワリード難民キャンプで、右から国井さん、ムハンマド医師、佐藤真紀さん

2008年12月10日

「世界人権宣言」が国連で採択されて60年です。第二次世界大戦のあと、2度と同じ悲劇は繰り返さないという誓いの元に生まれました。世界中のすべての人たちの人権を守るために。

ちょうどこの原稿を書いている12月10日。アムネスティ・インターナショナル日本が主催の、「和太鼓とアイヌ音楽」のライブに行ってきました。まさに、この日に相応しいイベントです。

私はアイヌの伝統弦楽器「トンコリ」や、「ウポポ」という伝統的な歌を聴くのは今日が初めてでしたが、厳かな旋律、優しげなハーモニーに魅せられてしまいました。

そして和太鼓。力強さと繊細さがミックスされた、日本の誇るべき音楽です。自分の原風景を思い出し、「日本人で良かった」と心から思いました。

和太鼓もアイヌ音楽も、それ自体とても魅力的なものです。

しかし同じ空間で両方の音楽を聴き、自分のルーツである日本の音楽の素晴らしさを再確認することで、よりいっそう、「アイヌ音楽を大切にしたい」「アイヌの人々や伝統をもっと大切にしたい」と思ったのです。自分の文化を大切に思えるからこそ、他の文化も大事に思えることを、改めて実感しました。

アル・ワリード難民キャンプで出会った人たち

そんな興奮冷めやらぬうち、私の心にふと浮かんだのは、イラクのアル・ワリード難民キャンプで出会った人たちのことでした。このキャンプにいる難民たちは、パレスチナ人です。多少流動しているものの、現在1800人がそこでの生活を余儀なくされています。

同じ土地で違う民族が共生することは、そんなに難しいことなのでしょうか。JIM―NET事務局長の佐藤真紀さんがこんなことを言っていました。

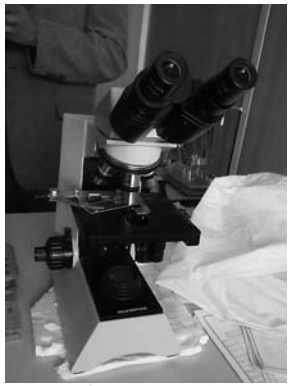
「ヨルダン西岸やガザのパレスチナ人を支援する人たちはたくさんいる。でも、イラクで迫害されているパレスチナ人には、誰も目を向けない」と。

私はその話を聞いて、「誰も関心を示さないなら、私が彼らのそばにいよう。彼らの声を多くの人たちに届けよう」と思いました。そのためにも、今JCFがアル・ワリード難民キャンプで行っている活動は、必要な限り続けていきたいと思っています。

看護師として、アル・ワリードでの目標

アル・ワリードには診療所があり、外国のNGOにより医薬品の支援は充分に受けているのですが、検査機器がまったくありませんでした。血液検査、検尿、検便、感染症の検査キット等、必要と思われるものを提供し、それが効果的に使われているのかフォローしていきます。

11月上旬に導入されたのですが、検査技師がキャンプに毎日やってくるわけではないので、実際に機器が稼動するのは週2～3日とのこと。私が今回訪問したのは12月2日なので、まだ始まったばかりで、評価ができない段階でした。検査機器がない今までは、診療所で診きれないと、ルトバやカインという数百キロ離れた街の病


JCFが支援した光学顕微鏡

キャンプ内に整然と並ぶトイレ、シャワー

院まで搬送していました。もちろんその搬送自体高額（これはＮＧＯ負担）ですが、それ以上に患者の体に負担がかかってしまいます。体調が悪いときに長距離の移動は、心身ともにしんどいですよね。

今回機器を導入したことで搬送する患者の数を減らし、患者の負担を軽減していきたい。それが看護師としての私の目標です。

インフラの整備

アル・ワリード難民キャンプは夏ごろから徐々に場所を移動しはじめました。今もまだ引越しの途中ですが、あと3家族の移動が残るのみです。元のキャンプから遠く離れたところに移動したわけではなく、道路を挟んだ真向かいに移動しただけです。

なぜ移動したのでしょう？

セキュリティの強化と、インフラ整備のためです。インフラとは、主に水の供給です。今年の6月にアル・ワリードを初めて訪問したとき、水が圧倒的に足りないことと、悪臭を放つ汚さに、頭がクラクラしました。今回診療所で会ったＵＮＨＣＲ（国連高等難民弁務官事務所）の職員は自慢げに「水まわりがよくなった」と話し、診療所のスタッフは「まだ水が足りていないのは問題だけど、水質は良いよ」と。確かにキャンプ内は、「家族」「独身女性」「独身男性」など住み分けができていて、道沿いにトイレやシャワー室が完備されています。しかしトイレの水道の蛇口をひねっても、「あれっ？？水が出てこない…」

途中で破裂している水道管

どうやら水道管が破裂して、トラブルが起こっているようです。水道管がプラスチックなので壊れやすいと言っていました。でも水が出ない水道はここ1箇所だけではなく、次の水道も、また次の水道も…。もちろん、水洗トイレの水が流れないものだから、トイレは汚染されています。トイレには電気がなく暗いので、女性は使いづらいとのこと。しかし6月のときと違うのは、キャンプ内に悪臭が漂っていないことです。以前は、テントの隣に各家庭でトイレを作っていて、水溜りの中に排泄していたのですが、今回はそういう光景は見られませんでした。多少なりともインフラが整備されている証でしょうか。

まだまだ深刻な水不足

しかし水不足は深刻です。ＩＣＲＣ（国際赤十字）が毎朝水を供給するのですが、1時間で水はなくなってしまいます。だからお金のある家族は、道行くトラックのドライバーから水を買ってしのいでいます。

キャンプのインフラ整備を請け負っているのはイラクの会社ですが、現状の不満を述べるとイラク警察に捕まるので、みんな言えないでいる

容器には汚い水が…

のです。ですから、「イラク警察より米軍の方がマシさ」と言う人たちもいます。

私たちはキャンプを一回りした後あるテントに招かれ、その家族の既往歴や歴史に耳を傾けていると、コーヒーが出てきました。コーヒーをご馳走になったあと、キャンプの水がどんなに汚染されているかという話になり、容器に飲み水を入れて持ってきてくれました。

「薄茶色…。もしかして私が飲んだコーヒーはこの水を使ったのっ？？」

ひゅるるるる～～。

私の心には一瞬、そんな漫画のような音が流れました…。診療所のムハンマド医師は、「このキャンプに移ってからコレラは出ていない」と言っていましたが、時間の問題かもしれませんし、水による感染症はコレラだけではありません。私たちがいくら検査機器を提供し、医薬品が豊富でも、病気を発症しないように予防していかないと意味がないわけです。

遠心分離器

しかしこれは、ＪＣＦやＪＩＭ―ＮＥＴだけでどうにかなる問題ではありませんし、今回機器をスムーズに導入することができたのは、ＵＮＨＣＲの協力があってのことです。同じキャンプを支援していくのですからＵＮやＩＣＲＣとの協力の下、より良い医療環境を目指していければと思っています。

安全で安心して暮らせる土地への定住を

これからアル・ワリードは厳しい冬に見舞われます。１月のうち10日は雪が続くそうです。雪が30センチ積もり、その重みでテントが潰れることも多々あります。そしてテントの中は、寒暖の調整が困難です。

そんな状況の中で生きている彼らのことを、心の中にそっと置いてください。イラク戦争の後、どうして彼らが迫害されなければならないのでしょうか。サダム・フセイン政権時代、サダムはアラブの中で名声を得るためにパレスチナ人を政治的宣伝に利用し、あたかもパレスチナ人の庇護者であるかのように振舞っていました。確かに彼らはサダムに優遇されていたでしょう。でもそのことに対して、パレスチナ人に非はありません。そしてアラブの同胞にも関わらず、どの国もイラクから逃れるパレスチナ人に手を

差し伸べないのです。どうか、そんな彼らに思いを寄せてください。

「世界人権宣言」が採択されてもこの60年間、パレスチナ人の苦しみは軽減されていないのです。先日ある弁護士がこんなことを言っていました。

「難民条約は二分法です。難民申請者を認定するということは、認定されない人を生み出すことになります。難民を排除する条約でもあるのです」と。さらにその方は続けて、「必要なのは難民条約ではなく、入国の自由を認めることです」と。これについては、様々な観点から意見がでるかと思います。しかし人間には移動の自由があり、住みたいところに住む自由があるはずです。

アル・ワリード難民キャンプの人たちが本当に望んでいるのは祖先の地に帰ることです。もしそれが叶わないのならせめて、安全で安心して暮らせる土地に定住できるよう見守っていきたいと思います。

イラク戦争とパレスチナ難民

加藤　丈典（ＪＣＦヨルダン事務局）

イラク国内では今後数ヶ月、大きな政治的動きがみられることになるだろう。

まず、アメリカとの間で数ヶ月に渡る交渉を続けてきた「治安合意（外国軍部隊撤退合意）」に先日、調印がなされた。これまでは国連の管理下のもと、米軍を中心とした外国部隊の駐留が認められていたが今年の12月31日を以て国連の手を離れることになり、アメリカとイラクの間で直接、米軍の駐留を規定し直した。これまで撤退時期をめぐって交渉が難航していたが、この合意によれば２０１１年12月31日までには米軍がイラクから完全撤退することになっている。

しかし、この合意に反対する勢力からは、米軍の駐留をイラクに認めることになるということから、未だに激しい議論が続いている。特に今年３月にイラク政府軍との間で激しい武装衝突を繰り返した、反米シーア派勢力の「サドル潮流（サドル派）」は米軍に対する闘争を再び活発化させると声明をだしており、安定しかけていた治安が再び悪化することが懸念される。さらに来年１月には県議会選挙が控えており、この前哨戦と思われるような、不穏な空気がイラク全土を漂っている。10月の初旬に起こったモスルでのキリスト教徒迫害がその一つだろう。

イラクは石油の豊富な国であり、これまでも、イラク中央政府（バグダード）とクルド自治区（アルビール）の間で、石油が豊富な地域の支配権争いが続いており、今度の県議会選挙でも石油が豊富なカルクークでは、選挙の実施法案を巡って激しい対立が続いてきた。結局は収拾がつかないまま、カルクークとクルド地区３県は選挙の実施を延期するとして棚上げされてしまった。同様にバスラは南部で最も石油が採れる地域であり、ペルシア湾に面した大きな港も保有していて、ここでも自治区化の話が持ち上がっている。イランのシーア派勢力がここでの主権を確保しようとしている。この数ヶ月間で、まさにイラクというケーキを巡って様々な勢力が相争う構図がさらに浮き彫りにされてくるだろう。２００３年に米軍によって外された「タガ」はいまでも外れっぱなしなのである。

イラク戦争は、イラク人だけではなく、様々な民族や宗教によって編み上げられていたイラクのタペストリーを無茶苦茶にしてしまった。直接の戦争被害を被ったイラク人に加え、前体制が崩壊した後、後ろ盾を失った少数派の人々も戦後の激しい混乱の中で大きな被害を被っている。

１９４８年のナクバ（イスラエルによるパレスチナ占領）以降多くのパレスチナ人がイラクに避難してきていたが、イラク戦争後、イラク国内で生活していたパレスチナ人に対する迫害が激化した。戦争後、殺害されたパレスチナ人は６００人以上に上るといわれている。彼らは脅迫を受けたり、不当逮捕で拷問に遭ったりという迫害が繰り返されたためにイラクを捨てて国境に逃れてきた。そのようなパレスチナ人がイラク・シリア国境におよそ２３００人存在し、第三国への受け入れを待ち望んでいる。

難民キャンプでの生活

イラク・シリア国境には大きく分けて３つのパレスチナ人難民キャンプが存在する。シリア側に在るタネフキャンプ、シリアのハッサケ近郊に在るアルフールキャンプ、そして最も収容人数が多く、その状態が劣悪であるのが我々の支援するアルワリードキャンプである。

２００６年末に32人のパレスチナ人がここに避難してきたことに始まり、イラクから避難してきた難民が増え続け、現在その数は１８００人以上に上る。難民生活の厳しさを伝える記事がインターネットのサイトに多く掲載されているが、その中でニダーという少女の物語があったのでこれを紹介し、難民生活の厳しさを垣間見てみよう。

（前略）

ニダーは真っ暗なテントの中で、探し物をしていた。明かりを付けよう。そうすれば、探し物がみつかるはずだ。彼女が旧式のガスランプを手に取ったとき、燃料のガスが彼女の服に纏わりついていることには気がつかなかった。彼女がランプに火を灯した次の瞬間、彼女の手足に火は回り、あっという間にテントを燃やし尽くしてしまった。

ニダーは怖くてたまらず、助けを求めてテントを飛び出した。そして自分に燃え移った火を消して欲しいと叫び

ニダー達が暮らすテント

まわり、そこら中駆け回った。様子がおかしいことに気がついた難民達は外に出て、テントが燃え盛っていることに驚き、消火を試みた。しかし消火器はなく、水もみつからない。彼女の足で燃える火を消すために泥をかけようとしたが、それすら無駄であった。結局テントと彼女の足を襲った炎が自然に消えるのを待つしかなかった。

ニダーの足は火傷で無残に爛れてしまい、肉は裂けていた。命はなんとか助かったが、厳しい火傷との戦いが始まった。ニダーは火傷のあまりの痛みに叫びを上げたが、鎮痛剤はキャンプにはなかった。彼女の痛みを和らげてくれるものは、ここでは何も手に入らなかった。治療の経験など何も無い者が付き添うのみで、彼女は食事も取れず、眠ることもできないまま1週間を苦痛のなかで過ごした。

父親は彼女の体に障らないように、そっと部屋に入って、彼女の様子を見た。ろうそくのように溶けてしまった娘の足を見るたびに目の前が歪む。キャンプの誰も彼女をどうしてやることもできず、薄い布の間に横たわらせているだけだった。バグダードに運ぶのはみすみす殺されにいくようなものである、キャンプから一番近いアルカーイム病院でさえもここから5時間もかかるところにある。それに不衛生なことで知られており、みんなそこを屠殺場だと呼んでいた。望みは薄くなるばかりであった。

彼女の容態が悪くなるばかりで、みんなが望みを捨てかけていたところ、ようやく彼女を治療のために受け入れても良いと、とあるアラブの国が手を上げた。

運ばれた先の病院で、彼女の足は非常に危険な状態であり、この状態が続けば、両足の切断も余儀なくされることになると告げられた。

病院にいる間、彼女はテントでの生活の不満や辛さを語った。

「あそこの生活は退屈だし、決まったことしかできないの。台所を掃除して、水を汲みに行って、それに人目を忍んで共同トイレに行かなきゃならない。私が花瓶に水を入れて外に出れば、誰だって私がトイレに行くってわかっちゃう。それに時には何時間も待たされることもある。あそこでの生活は食べること、寝ることだけ。何も変わることなんかない。私はこの世界で生きている他の女の子達とは違う世界で生きている。勉強もできない。本もない。ノートもない。電気もない。薬もない。でも夢を見るの。いつか自分の家に住んで、他の女の子達みたいに綺麗な服を着てみたい。そして勉強して将来は医師になりたい」

彼女はこうして希望を語ったものの、自分が負った重度の火傷が、これからの人生に大きな影響をもたらすのではないかと不安にかられながら過ごしている（後略）

http://www.insanonline.net/print_news.php?id=1521

この話は２００７年９月に掲載されたものだが、１年以上経過した今でも彼女はこのキャンプで生活を送っている。現在はバグダードの治安も比較的安定したので、バグダードの病院へ定期的に通い治療を受けることができている。また幸いにもスウェーデンが彼女の受け入れに向けて動いているという話があり、実現することを願うばかりだ。ちなみに、これは物語風に描かれているが、彼女を第三国に移すように求める嘆願書である。少しでも人の印象に残るようにと、このような形で嘆願書をインターネットや雑誌などに掲載し、難民問題の早期解決を人々に訴えているのである。

医療

キャンプでは難民の健康管理が最も重要な課題とされる。しかし彼らは国境に阻まれ、非常に狭い区域での生活しか許されておらず、救急搬送が大きな課題として常につきまとう。

このキャンプでは、急病人が出た場合、イラク国内の病院に搬送する、しかし上記の少女ニダーのようにかえって危険にさらされる場合もあり、容易なことではない。現在のキャンプの医療事情はＵＮＨＣＲ（国連高等弁務官事務所）とイタリアのＮＧＯの協力もあり、キャンプ内には診療所が設置され医師も常駐し、改善されている。また簡単な薬品も準備されている。しかし患者の容態を調べるための検査機器が欠如していたため、医師がいても検査ができず、結局検査のために病院へ搬送せねばならないという状態が続いていた。

我々はＪＣＦの支援によって最低限の検査機器をキャンプ内に設置し、医師が正しい診断、正しい処置を下せるようにさらなるキャンプの改善を行なっているところだ。現在医師２人と検査技師１人の態勢で、このラボの運営が始まっている。

また、救急以外に慢性疾患に罹る患者も非常に多いし、それに加えて精神

を病んでいる患者も多数存在する。というのも、ここに住む人達のほとんどが家族の誰かが殺されたり、誘拐されたり、拷問を受けたりした経験があるものばかりである。テントに入り、話を聞けば、拷問によってできたアザや、

アル・ワリードキャンプ内の診療所

無残に殺された家族の遺体の写真をみんなが見せてくる。ここはそのような人々ばかりだ。そのため深刻な欝状態やその他の精神病に悩まされるものが多いのである。しかしキャンプの医師は精神専門医ではないために、どのように対処して良いかわからないと嘆いている状態だ。

教育

キャンプを訪れた時に、目を引かれるのは彼らの教育に対する関心の高さである。ここには多くの子供達がおり、彼らはバグダードにいた時から迫害や誘拐を恐れて学業を中断せざるをえなかった。何もない閉鎖された環境であっても彼らは教育に対する関心を失ってはいない。学校を開設し、教えられる者は誰でも教壇に立つ。高校課程、大学課程にある若者もおり、彼らが学業を続けるのは甚だ困難であるが、それを補うために電子媒体などで勉強を続けようとしている。

アルワリードからほど近いタネフ難民キャンプでは大学の修士課程に相当する学生や、博士号を取得しようとする難民の学生も存在するのである。難民キャンプの教育委員会のメンバーは「教育だけが我々の唯一の武器なのです」と強く語った。

キャンプの生活ではその生活環境の悪さだけでなく、色々な問題が起こる。今年5月には、キャンプを管理するイラク軍とアメリカ軍が入り込み、難民と衝突する事件が発生した。キャンプの難民の中には、イラク国境警察に雇われ、そこで働いているものもいる。

しかしその当時、イラク警察から日当が払われなかったとして、一部の難民が仕事を放棄しキャンプに引きあげてしまった。数時間後、その難民達を引き渡すよう、イラク軍とアメリカ軍

がキャンプに要求したが、難民達はそれを断った。そうしてついには発砲事件までおこり、逮捕者がでる騒ぎにまで発展してしまっている。

またキャンプが大きな幹線道路側に位置するために、交通事故も発生する。夜中にテントから出て遊んでいた子供が物資輸送のトラックにはねられて死亡した事件も報道されている。

それ以外にも、砂嵐によってテントがひっくり返されたり、大雨による浸水などもたびたび起こる。特にアラブは冬に雨がおおくなるため、砂漠の寒さに加えて今後は雨による被害も増えるだろう。

彼らはイラク戦争により、住処を奪われてしまったが、実際は60年前からパレスチナ人の難民生活は続いている。現在もＵＮＨＣＲが彼らの受け入れ先を探すため色々な国と交渉を続けている。本来ならば、彼らはアラブ人であるので、同じ言葉、同じ文化、同じ宗教を持つアラブ・イスラーム諸国への移住を希望する。しかしアラブ諸国からはこれまで良い返事が返って来なかったため、難民達はＵＮＨＣＲに対しアラブ諸国への交渉を止め、ヨーロッパや南米への交渉に集中するように求めている。彼らの言葉を借りれば「アラブによるアラブ人難民の無視」ということになるのだろう。

キャンプに住む、一人の老婆が涙ながらにこう語った。

「私たちは生まれてからずっと難民としてテント生活を送ってきた。イラクで安心を得たと思ったら、再び追い出されてしまった。私達パレスチナ人は同胞からも嫌われてしまったのよ」

人道支援に携わる、とあるヨルダン人は、

「これは我々アラブが真に恥ずべきことです」とため息をついた。

アラブ人が救いの手を伸べられない複雑な状況がそこにある。同胞であるはずのアラブからの支援が見込まれないことが、彼らの孤独を一層重いものにしている。

パレスチナ人以外にもクルド系イラン人のように、難民としてイラクに逃げてきたが、戦争によって再難民化してしまった者も多く存在する。彼らは生まれてから一度も国を持ったことがなく、くしゃくしゃな古びた難民証明書だけをＩＤとして保持するのみである。イラク戦争によって被害を被った非イラク人達の叫びは砂漠に吹きすさぶ厳しい風によってかき消されてしまっている。

プラハの春

支え合って 21世紀

◆ 新しいＪＣＦ会員制度◆

2008 年度総会で審議された結果、会費制度が変わりました。

■正会員；会員総会において議決に加わることができます。
年会費　１口 10,000 円（何口でも）
正会費をお振り込み下さった方を正会員として登録いたします。
■賛助会員：この法人の目的に賛同して、資金協力を行う個人及び団体
年会費　１口 3,000 円（何口でも）
★今までと同様に会費納入から１年間が会員有効期限となり、
「グランドゼロ」やイベント等のお知らせをお送りします。

特別賛助会費・事務局ガンバレ会費は無くなりました。制度変更前にお振込み頂いた方については、振込から１年間は特別賛助会員・事務局ガンバレ会員として登録させていただいております。

大勢の皆さまに会員としてＪＣＦを支えていただくように、よろしくお願いします！

■ＪＣＦ会費振込口座

郵便振替口座番号	00560-5-43020
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

プラハの春

鎌田　實（ＪＣＦ理事長）

チェロを演奏するブラダン・コチ

ブラダン・コチとの出会い

人間の心が政治や経済に翻弄されることがある。

ビルマ（ミャンマー）のアウンサンスーチーのように、政治によって人生をめちゃめちゃにされた人もいる。東西冷戦下では、何百万人もの人が全体主義の餌食になり、生活の質も人生の質も魂の質さえも、押さえつけられた人々がいた。

４年前突然、山口さんという方から電話がかかってきた。面識はない。コンサートの押し売りだった。チェリスト、ブラダン・コチの日本での生活のお世話をしているという。

諏訪中央病院では19年間、畑中良輔先生を中心に、日本の著明な音楽家たちによるホスピタルコンサートを行ってきた。

ロビーでコンサートをしたいという希望は、実はたくさんある。ほとんどをお断りしている。あるレベルに達していること、音による暴力にならないこと、患者さんの体や心に元気を与えること、病院の雰囲気にマッチしていること。病院でコンサートをする以上、患者さんに迷惑をかけるわけにはいかない。それなりのレベルの音楽でなければ、患者さんの体にマイナスになってしまう。頭の中でそれらをジャッジしてきたつもりだ。

ぼくの態度は煮え切らなかった。どちらかというと、お断りする方向でお話ししていた。コチがどの程度の音を出せる人なのかがわからない。

山口夫妻は食い下がってくる。ねばってくるのである。すばらしい音楽家だという。

山口夫妻のねばりに負けた。ロビー・コンサートが行われた。

はじめの音を聞いたとたん、ああすごいと思った。澄んでいる。温かい音なのに軽くはないのだ。力強く、重く、そして柔らかい。不思議なチェロだった。少年のような顔で、にこにこしながらチェロを奏でる。

これほどの技量をもった男が、なぜボランティアでコンサートをしているのか、よくわからなかった。ぼくの心は驚づかみにされていた。

緩和ケア病室での演奏

1年ほどしてまた山口夫妻から電話を頂いた。今度は二つ返事でお願いした。

そのころ病院には、癌の末期を迎えた51歳の女性が入院していた。蓼科の森の中で小さなフランス料理レストランを営んでいた。お店ではいつもクラッシック音楽をかけていたという。ぼくは彼女にこんな素敵なチェリストがやってくると話していた。彼女はとても楽しみにしていた。

コチが2回目のロビー・コンサートにやってきたとき、彼女の癌は体中に広がり、衰弱が強く、ロビーに下りていく体力はなかった。どうしても聞かせてあげたいと思った。彼女は緩和ケア病棟2階の西の一番奥の部屋にいた。産婦人科、小児科、循環器の病棟に接している。吹き抜けのロビーから、各病棟を分けているドアをすべて開け放ち、病室のドアも開けて、彼女のところまで音を届けてあげようと思った。

ロビーでピアニストと音あわせをしていたコチに彼女のことを話し、「そのつもりで弾いてあげてください」と頼んだ。コチの目の色が変わった。彼は重いチェロをもちあげると、彼女のところへ案内するよう言った。

「私はそういう人のために来たのです。音楽を欲している人のために、音楽を届けにやってきました。そこで弾かせてください」

優しい人だなと思った。彼女の病室へ入るとニコニコした顔で握手をした。言葉はいらない。

バッハに続いて「浜辺の歌」が静かに奏でられた。まさ

か日本の歌を弾いてくれるとは思わなかった。彼女の目に涙があふれてきた。嬉しかったんだと思う。人生を振り返っていたのかもしれない。

彼女は自分が癌の末期であること、いよいよであることを、全てわかっていた。穏やかな顔で、涙をあふれさせながら聴いていた。

演奏が終わると、コチは彼女にハグをして病室を出た。2人とも、いい笑顔であった。

彼女1人だけのためのコンサートが終わると、彼女は傍にいたご主人に「ありがとう」と言った。すべてを受容したのだと思う。ずっとこの半年お世話をしてくれた優しいご主人に、「ありがとう」と「さよなら」を伝えた。コチの音楽が一人の患者さんの「受容」を導いたのである。すごい音楽家だと思った。

人を愛したい

コチという男に徐々に興味を持ち出した。音楽家として来日している。東京で大きなコンサートを終えると、どこかでボランティアの演奏会をすることを望んだ。山口夫妻にそれを頼んだという。なぜここまでしてくれるのだろう。不思議だった。理由は徐々にわかってきた。

１９８８年、彼はチェコ・スロバキアの兵役を拒否して捕らえられた。刑務所では刑事犯と同じ独房に入れられ、良心の囚人となった。全体主義の国家へ弓を引いたことで、多くの友人が去っていった。もう一生音楽をさせないと言われた。脅しだけではないことはよくわかっていた。そういう国であることはよく知っていた。

青年だった頃から、ギターを片手に歌を歌い、民主化運動を行っていた。共産主義体制の国家にとって、この青年は目の上のこぶだったのである。

国の大きなお祝い事の際、恩赦が行われた。二度と国家に反逆しないよう言われ、刑務所から出された。

政府は再び彼に徴兵の命令を出した。当然、国家は今度こそ従うと思っていた。しかし彼はぶれなかった。彼の意思は変わらず、兵役を拒否した。

どうしてそんなに勇気があるのかとぼくは聞いた。自分には人を殺すことはできない、と彼は答えた。ガンジーの非暴力の実践と思想に共感していた。ガンジーにならって断食を行ったこともあった。人を殺すための軍隊には入りたくない。戦争が始まったとしても、戦場で自分を守るために人を殺すなんて自分にはできないと思った。

「私は人を愛したかった」

そうか。彼は、人を殺すのではなく、人を愛したいと思ったのである。

もう1つ理由があった。自分の心をごまかしたり、欺いたりすることはできないと思ったのである。どんなに強圧的なプレッシャーをかけられても、人間の心は変えられない。そう信じたかった。彼は国家に対して目にもの見せたかったのではないだろうか。すごい男である。

コチ氏からの提案「プラハでのレコーディングを！」

３回目に諏訪中央病院へ演奏に来たとき、１年前に奥さんを看取ったご主人が、コチに言った。「あなたの音楽に救われました。妻も自分も一番つらいときにあなたの音楽に救われたのです。感謝しています。ありがとう」

コチは温かな優しい顔で、ご主人の手を握った。ぼくはこの男がどんどん好きになっていった。

また翌年にも、日本にコンサートにくるので、諏訪中央病院へ寄りたいと電話がかかってきた。大歓迎である。

けれどもちょうどその頃ぼくは、イラクの難民キャンプに子どもたちの診察に行っている予定だった。ぼくはイラクやヨルダンと掛け合い、自分のスケジュールを大幅に変更した。厳しい調整だったが、どんなことがあってもコチに会いたいと思った。

２００８年3月14日の朝、ぼくは成田に着くと、そのままあずさを乗り継ぎ、諏訪中央病院に向かった。病院に着くとすでにコチは準備を進めていた。そして14時からロビー・コンサートが始まった。病院の中に、彼のチェロが溶け込んでいく。

ぼくがイラクの難民キャンプに行ってきたと知って、コチは驚き、共感してくれた。今度は彼がぼくに興味を持ち始めた。そして、ドクターカマタの協力をしたいと申し入れてくれた。

「プラハでレコーディングをしよう」

ＪＣＦがイラクやチェルノブイリの子どもたちの薬代を稼ぐために作った〝がんばらない〟レーベルの第３弾ＣＤの製作に協力してくれるというのである。

ＪＣＦに毎年たくさんの寄付をして下さっているスイスの団体から、夏、講演に呼ばれていた。同時に、チェルノブイリ放射能高汚染地のベトカという小さな町を訪れ、地域病院と15の診療所を回る予定だった。ベラルーシからプラハを経由して、スイスへ行くという強行スケジュールを作った。

２００８年8月、60キューリ以上の放射能汚染が残っているベトカの視察を終え、プラハに着くと、コチがにこやかな顔で迎えてくれた。

プラハ城旧市街地を案内してくれた。

自分の別荘に招いて、ファミリーコンサートも開いてくれた。妻のハナはプラハ音楽院でチェロを教えている。長男のトーマスは、アメリカのジュリアード音楽院に留学してチェロを学んでいる。現在大学院生である。学業も優秀で、コロンビア大学医学部に合格したという。17歳の妹ルーシーはバイオリニスト。なかなか美しい音色を奏でていた。トーマスのガールフレンドも来ていた。彼女もジュリアード音楽院でバイオリンを学んでいる。しかし、彼女はバイオリンが弾けなくなってしまった。日常生活には一切支障がないのに、バイオリンを持つと全く手が動かなくなるという。そんな彼女を見て、トーマスは神経内科の専門医になって、彼女のような患者さんの病態を改善してあげたいと思っているという。

このプラハ・チェロ・ファミリーとCDアルバムを作ることになった。カザルスの「鳥の歌」、ドボルザークの「新世界」より「家路」、サラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」、アルゼンチンタンゴ、そして51歳のあの末期癌の患者さんの心を揺さぶった「浜辺の歌」など。なんとも癒される魅力的なCDになりそうだ。

プラハを案内してくれたコチさん（右）と鎌田理事長

二度の投獄

プラハは音楽あふれる街である。市内の教会では毎夜コンサートが行われる。夜の街を歩きながら、色々なことを話した。

コチは両親のことをとつとつと話してくれた。

「両親は大学の歴史の先生でした。チェコ・スロバキアで生きるためにコミュニストの道を選んだのです。しかし1968年プラハの春で、父も母も改革派にシンパサイズしました」

1960年代、チェコ・スロバキアでは共産党一党主義やスターリン型経済体制への批判が表面化した。共産主義の枠内であったが、緩やかに民主化の流れが起きていた。改革派のドブチェクが第一書記に就任し、一気に言論の自由が叫ばれはじめた。様々な権利と自由の獲得に向かって走り出した。しかしプラハの春は約8ヶ月で終わった。

8月ソ連がヴァーツラフ広場に戦車で乗り入れたのだ。学生ヤン・パラフはこれに死をもって抗議した。ソ連軍がマスコミを支配化に置いたが、若者達はこのとき、ラジオから流れるマルタの祈りを聞いた。自由を求める歌。今も歌い続けているというマルタ・ビシュコワのライブをぼくはどうしても聞きたいと思ったが、残念ながら行くことはできなかった。

ソ連軍を盾にした保守派が巻き返し、改革派は追放され、両親も大学を追われて重労働をすることになった。母はその生活に耐えられず、政府に誓約書を提出し、大学に復帰した。コチが5歳のときだった。

両親は離婚し、母の元にひきとられた。母はやがて再婚したが、新しい父親にも息子がいた。

コチは必死で本を読んだ。トルストイやドストエフスキー、あらゆるジャンルの本を読みながら、自分の心を作っていった。

兵役を拒否したとき、トーマスは3歳だったという。「共産主義の国で、政府に反対することが恐くなかったの」とぼくは妻ハナに聞いた。

「彼の信念を守ってあげたいと思いました。数年前から警察には尾行されていました。私達夫婦は何もしていないのに。自由な社会にしないといけない。民主主義が必要。そう思っていただけで、私達は普通の弱い市民です。夫の考えは間違っていないと思いました。応援してあげたかったのです。

私達夫婦は、教会には通わないけれど、神の存在を信じ

ています。夫は18歳のときから聖書を読んでいます。共産主義の国で宗教は否定されていたけれど、彼と生活するようになってから、私も一緒に聖書を読むようになりました。私達の心の中には共通の信念があります。だから、恐くはなかったのです。

最初に捕らえられたときは、アムネスティ・インターナショナルがプレッシャーをかけてくれたお陰で、夫の命は守られました。アムネスティは私達家族の生活のことも少しだけ気にかけてくれていましたが、生活はとても厳しいものでした」

そんなとき何度か、手紙と一緒にわずかなお金が送られてきたという。いつも同じ架空の住所からである。国に歯向かったことでたくさんの友達が去っていったが、プラハにも理解してくれている人がいると、コチ夫婦はうれしかった。

彼は1度目の牢獄生活の後、神の声を聞いたという。「あなたは二度と投獄されることはない」と。刑務所から解放されると、非合法の平和団体の雑誌のインタビューに応じ、神の声について話した。

その後コチは、再び牢獄に入れられたが、インタビューはそのまま雑誌に掲載され、「二度と投獄されないと言ったブラダン・コチはこのインタビューの後捕まった」と追記されていた。彼の面目はずたずたに傷つけられた。

「私は打ちのめされましたが、この経験から、神は人間の理解を遥かに超えて存在していると感じました」とコチは言う。大切なことだと思う。信仰することで良い生活ができると思うご利益主義の欠陥に彼は気が付いたのである。彼は教会に行かず、妻と聖書だけを読む生活をするようになった。モラリティを強めているのだと思う。

「私はキリスト教を信じているが、キリスト教徒が陥りやすい独善性、排他性には問題を感じています。だからキリスト教だけに固執するつもりはなく、他の宗教に対してもオープンでいたいと思っています」と彼は言う。宗教の存在はぼくも大事だと思うが、寛容性のなくなった宗教は大変危険だ。今のイスラム教とキリスト教の対立も、大きな問題である。それに比べると仏教はあいまいで寛容である。このあいまさや寛容さが、それぞれ違う人間が生きていく上で大事なように思う。

中には、多くの人を一同に集め、音楽で気持ちを高揚させ、集団催眠のような状況を作り出し、信ずれば全ての問題は解決すると人々を導くキリスト教会があるが、そのようなやり方には自分は反対である、ともコチは言っている。

宗教にコントロールされておらず、宗教をコントロールしているところに、彼の強さを感じた。

コチさん一家のファミリー・コンサート（右から）妻ハナさん、トーマス君、コチさん、ルーシーさん

2度目の兵役拒否に、国は怒った。コチは再び投獄され、暴力を受けた。厳しい牢獄生活が半年続いた。

1989年ベルベットレボリューション（ビロード革命）が起こった。民主化を叫んで100万人の若者たちがプラハの街に集まった。1968年には、「プラハの春」は名前だけで終りをつげた。今度はソ連でペレストロイカが起こり、ソ連軍は動くことができなかった。ベルリンの壁が崩壊して1ヶ月後、各地で民主化の風が吹いた。血を流すことなく民主化が成功したのである。12月1日、コチは自由の身となった。全体主義の政府は負けたのである。

ドイツのマインツに亡命中のルーマニアの2人の音楽家が、コチの釈放を求めてコンサートを開いてくれたことをあとで知った。1人で生きているのではないとそのとき実感した。たくさんの人に支えられてある命だと気付いたのである。以後、人権を損害されている人たちを救う活動をしているアムネスティ・インターナショナルの支援をするようになった。

ブラダン・コチを支えているものは、家族と宗教と倫理感だと思った。

「プラハの春」

コチは、自分が築いた家族を大切にしている。妻と2人の子どもを必死に守っている。4人の家族が作った楽団プラハ・チェロ・ファミリーをものすごく大切にしている。妻も子どもブラダン・コチを尊敬し、愛していることがよくわかる。

娘ルーシーとものすごく仲がいい。ルーシーは父親の肩に抱かれて話をする。ルーシーが小さいときには毎晩自作の昔話を聞かせたという。毎年夏には、アルプスの山の中で家族で1週間テント生活をするという。贅沢な生活はしない。心豊かな生活をしている。3日間一緒に過ごしてそれがよくわかった。別荘にも無駄な物は一切ない。質素で丁寧な生活が伺える。本物の良い生活をし、弱い人に何かを与えようと彼は努力していた。

「ビロード革命によって民主主義体制が確立して約20年、自分は大好きな音楽をすることができ、恵まれた生活をしています。この自由はすべての人間に与えられるべきものだと信じています。そんな世界が実現されることを願っています」と彼は言う。自由への希求は大きい。

「音楽は、人の心に安らぎや喜び、癒しをもたらします。自分のコンサートでそれを表現したいのです。そしてコンサートに来られない人々のために、病院や老人福祉施設などに出向き、コンサートを行っていこうと思っています」

温かな男である。最後の日、彼はプラハのホテルまで迎えにきて、空港まで送ってくれた。別れた後、ぼくは彼の車の中に帽子を忘れたことに気がついた。20分ほどすると彼は帽子を届けに舞い戻ってくれたのだ。すばらしい友人ができたと思っている。

来年の春、プラハ・チェロ・ファミリーと日本のピアニスト有吉さんで、鎌田實プロデュースの〝がんばらない〟レーベル第3弾、「ふるさと～プラハの春～」がリリースされる。3月13日東京で記念コンサートも行う予定で準備に入った。たくさんの方に聴いていただきたい。感動すること間違いなしです。同時に、病気で苦しむイラクやチェルノブイリの子どもたちを救うことができます。ご協力お願いします。

チャリティコンサート

ふ る さ と

～ The Prague Spring（プラハの春）～

2009 年 3 月 13 日（金）

会場　津田ホール

東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-18-24 津田塾大学　千駄ヶ谷キャンパス内

開演　★第 1 回　14：00（開場　13：30）

★第 2 回　19：00（開場　18：30）

料金　★第 1 回　3000 円

★第 2 回　3000 円

チケット販売：ローソンチケット（L コード 32668）◆ 1 月 10 日発売開始◆

主催・問い合わせ　JCF/ 日本チェルノブイリ連帯基金（Tel. 0263-46-4218）

協賛　V・コチ　チャリティコンサート実行委員会

JIM-NET/ 日本イラク医療支援ネットワーク

プログラム

お話：鎌田　實　・・・・30 分

演奏：ブラダン・コチ（チェロ）

有吉　英奈（ピアノ）　・・・・60 分

レーベル第 3 弾 CD「ふるさと～プラハの春～」はコチさん家族と有吉さんのすばらしい演奏で作られています。この日、発売を予定しています。

JIM-NET 活動報告

イラクに入れないながらも、支援が続いている。現地のドクター達との信頼も築かれてきた。日本中のたくさんの方々の結集で子ども達に薬代をおくろう。限りなき義理の愛大作戦 2009 がスタートした。

ベラルーシの病院にクリスマス・お年玉支援を！

ナジェージダ 2008

★ゴメリ州立病院へ妊婦の経膣用プローベを！

ゴメリ州立病院付属産院には、4 年前に妊婦検診の超音波診断装置を支援しました。それまで、超音波診断の経験がありませんでしたが、産院のドクター達は、ミンスクで研修をつみ、素晴らしい超音波診断技術を修得しました。生まれたばかりの赤ちゃんの脳、内臓の異常を超音波で的確に捉え、治療につないでいます。今年度は、**妊婦の経膣用プローベ**（E721：約 150 万円）の支援を考えており、医師達も出産前診断を更に正確に行なおうと意欲的です。

★ベトカ地区病院へ甲状腺のホルモン検査機器を！

ベトカ地区病院のナジェージダ院長から、**甲状腺のホルモン検査機器**のリクエストがありました。

「小児甲状腺がんは 95 年をピークに、現在は欧米並みになりました。しかし、大人の甲状腺がんが増えています。過去 10 年間で 4 人の発症だった甲状腺がんが、この 4 ヶ月で 3 人もいました。ゴメリの放射線医学人間環境センターが、治療を担っていますが、検査の試薬が高いため、大人が検査を受けたくても断られてしまいます。この地区病院で検査できればとても助かります。**甲状腺のホルモン検査機器**（ELx800：300 万円）が入れば、子どもの時、甲状腺摘出手術をした青年たちの検査もできます」

☆ナジェージダへのご寄付は、2008 年 12 月 10 日現在、延べ 160 人の方から、1,091,671 円が寄せられています。

機器購入まで、引き続きのご協力をお願いいたします。

ナジェージダ＜希望＞振込口座

郵便振替口座番号	00520-6-10993
加入者名	ナジェージダ

ヨルダン・シリア報告

現地の人々の将来の生活のための援助を！

大嶋　愛（ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局）

縁日企画で、左から大嶋愛さん、榧野ひかりさん

JIM-NET の榧野さん、大嶋さんは 10 月 8 日～ 23 日、ヨルダン・シリアに渡航しました。
現地で活動するＮＧＯと、イラク避難民の家庭訪問や小児科病棟の視察をし、協力団体としての関係を強化、今後の活動のためのヒントもたくさんいただいてきました。
2 人が見た、現地のＮＧＯ活動について報告をします。

●ヨルダン
・「アファークプロジェクト」と「マイクロプロジェクト」の活動を見学
・キングフセインがんセンターで縁日企画

アファークプロジェクト見学

イラクでは治療が難しいと診断された白血病や小児ガン、血液の難病の子どもたちが、ヨルダン王室の基金によりキングフセインがんセンターで治療を受けています。

ＪＩＭ―ＮＥＴではこのヨルダン王室の基金に年間２００万円の支援を行なっています。

また、ＪＩＭ―ＮＥＴ構成団体の「アラブの子どもと仲良くする会」と「スマイル子どもクリニック」では、治療が長期に渡り大変な家族の生活支援を行なっています。

患者家族の手芸品を日本で販売し、治療を続けられるよう支援するとともに、日本とイラクの相互理解や、友好の橋渡しをする。それが『アファークプロジェクト』です。

アファークはアラビア語で「水平線・地平線」という意味。限りない希望と夢を忘れずにという思いを込めて、患者さんのお父さんがつけました。

長期滞在の家族だけでなく、短期で検査や治療に来る患者を含め、多くのイラクの人たちにアファークの輪を広げていくことを目指しています。

治療段階によって、子どもたちの様子も様々です。

手術直後で胸にプラスチックの器具をつけ、兄弟たちと遊ぶ元気もなく、お母さんの側から離れない子や、骨髄に注射を打ち痛くてぐずっている子もいれば、おにいちゃんと元気にサッカーをする子もいました。

子どもが病気ということでさえ大変なのに、生活の不安もかさなり、お父さん、お母さんたちはとても重い心労を抱えていると思います。アラブの子どもと仲良くする会の西村さんが足しげく家庭を回るのは、技術指導だけではなく、家族の不安を聞き、取り除く仕事もあるのだと思いました。そういった仕事ができるのは、現地で患者家族を支え、支援を続けてきた西村さんだからこそです。

患者や家族の声を拾えるからこそ、支援の方向が見えます。「どれだけ寄り添えるのか」ということも支援に重要なのだと感じました。

「アファークに参加できて嬉しい！」「子どもがおとなしくしていたら、もっと集中して作業できるのに！」と、お母さんたちはとても嬉しそうでした。アファークプロジェクトでは、カレンダー作りの真っ最中！　病状により、長時間作成に関われない家族もいるので、治療や通院の負担にならないよう、効率的な作業過程を考える西村さん。今年のカレンダーもとても素敵な仕上がりです。

作業の説明をする西村陽子さん（右端）

縁日企画

キングフセインがんセンターで日本文化を知ってもらう意味も込め、イラ

クの病気の子どもに日本のお祭り体験をしてもらう『縁日企画』を行なってきました。縁日企画の中で龍笛（りゅうてき）・バイオリン・日本歌曲のコンサートもしました。

イラク人患者の家族たちも来てくれ、家庭訪問の時には人見知りをしておとなしかった子どもたちも、楽しそうに参加してくれました。

何十人もの子どもたちに浴衣を着せたり、折り紙を折ったりするのは大変でしたが、つらい治療が続く中で、少しでも楽しい時間を過ごせたようなので良かったです。子どもたちの元気な声や笑顔に触れることができ、とても素晴らしい時間になりました。

マイクロプロジェクト見学

イラク避難民を支援するアメリカのNGO「collateral repair project（CRP）」のアンマンチームでは、国連などの経済的なサポートを受けることができていない人たちを中心に支援しています。

このNGOが、お金の支援ではなく、生活していくために必要な仕事を支援するという「小額の初期投資で、ビジネスサポートをするプロジェクト」が『マイクロプロジェクト』です。

パソコンを支援すれば翻訳や書類を作る仕事ができ、ガス・オーブンレンジを支援すればケータリングの仕事ができます。仕事内容は各家庭によって様々で、裁縫・ピクルス作りなども行なっています。

どの家族も、ヨルダンに来た経緯を聞くとつらい経験があります。

「子どもが誘拐され、犯人の希望は妻の殺害だった。妻がスンニだったからだ。受け渡しの際に犯人と銃撃戦になり、犯人の1人を殺してしまった。犯人グループが覆面を取ったそこには、なんと自分のいとこが居た…。シーアの家系に、スンニの妻が嫁いできたことが許せなかったらしい。こんなことは今までなかった！　宗派なんて関係なく、イラクではみんな仲良く一緒に暮らしていたんだ。みんなが弱い人を思いやり、みんなが助け合って暮らしていたんだ。それがイラク人の素晴らしいところだったのに」と話すお父さ

マイクロプロジェクトで裁縫仕事

んの話が一番印象的でした。

車も家も家財道具もすべて売り払って、着のみ着のままヨルダンに来たものの、仕事もなくお金も使い果たし、生活に困っている家族ばかりでした。

●シリア
NGOバスマ見学

バスマは、小児がん患者の生活支援・心理ケア・院内ワークショップ等のサポートだけではなく、病院の薬剤調達や、医師・看護師の派遣も行っており、非常にしっかりと病院・患者との連携を図りながら活動しています。

JIM―NETのイラク人スタッフのイブラヒムがバスマで研修を受けるのに合わせ、その一部に同行しました。

バスマでは、大学生などのボランティアが、週3回小児がん病棟でワークショップを行なっています。歌・音楽・人形劇など子どもたちが楽しめるプログラムが豊富です。ボランティアが準備や活動を自主的に進める姿をとても頼もしく思いました。

NGOバスマ見学

また、患者家族に病気との向き合い方のレクチャーがきちんと行なわれること、遠方から来る患者家族のアパートメントがあることなど、多くの問題にNGO主導で取り組んでいる様子にとても感銘を受けました。

●おわりに

ヨルダンの2つのプロジェクトで訪問したイラク避難民家庭は、どの家庭も明るく丁寧に私たちをもてなしてくれ、子ども達は朗らかに笑顔を向けてくれました。逆境に立ち向かうイラクの人たちの強さをひしひしと感じました。

「お金だけが支援ではない」その場しのぎの支援ではなく、生活していくため、将来のためにどのような援助が必要なのかを2つのプロジェクトから学びました。

ヨルダンでは王室基金がNGOの形態を取って子どもたちの治療費を支援し、シリアでは民間NGOのバスマが病院内で活躍しています。ヨルダン・シリアでは国家財政が厳しく、国が薬

を100％供給できないので、NGOの力が必要なのだと感じました。

イラクでも国家の機能が復興していないため、薬が足りていません。

しかし、治安が不安定なままのイラク国内で民間の力が動き始めるには、まだまだ時間がかかるでしょう。

現在JIM―NET現地スタッフのイブラヒムはイラク・バスラで1人で活動していますが、1人の力には限界があります。

バスマのように患者をサポートするシステムを作り、イラク人が自分たちの力で運営できるよう、JIM―NETでも支援を行なっていければと思いました。

第8回JIM―NET医療会議
イスタンブールで開催

JIM―NET事務局

イスタンブール会議参加メンバー

日本とイラクの医師が支援内容を検討するJIM―NET会議が、10月15日と16日の2日間に渡り、トルコのイスタンブールで開催された。この会議では2004年から、イラクと日本の医師が定期的に集まり、支援内容の評価と今後の支援計画を議論してきた。

冒頭、会議を主導してきた井下医師は、「今後イラクが復興するにつれ、JIM―NETの役割も、学術的な協力に力を入れたい。そのための方向性を打ち出したい」と述べた。

今回は、信州大学医学部准教授の坂下医師も同行し、遺伝子解析の講義を行い、今後現地病院が遺伝子解析を取り入れることにより、治癒率が向上するようアドバイスしました。

JCFは、2009年1月に2名の医師をバグダッドから招聘し、遺伝子の解析に関する研修を地元松本市の信州大学医学部で実施することを決定した。遺伝子の解析が行われると、劣化ウランとがん発症の因果関係なども解明される可能性が出てくる。

バグダッドの子ども福祉教育病院のマージン医師からは、保健省の機能が回復しつつあり、薬品など供給が改善されてきていると報告があった。08年度は、保健省が必要な医薬品の50％を供給している。保健省とは会議開催直前に、今後必要とされる薬品に関しての議論も行われ、09年の初頭には、要求した薬品が届けられる予定になっているという。

マージン医師は、「抗がん剤を中心とした薬のほとんどは、今後保健省が調達できるようになると思う。今後JIM―NETからは、維持療法で必要な抗生剤や、検査に使う支援を検討してほしい」との申し入れがあった。

JIM―NETのまとめによると、08年4～8月までの薬支援の実績は、108、595ドルで、08年度の薬品供給は、ドル安の影響もあり3000万円以内におさまりそうである。

バグダッドのセントラル小児教育病院からは、JCFが寄贈したセルセパレーター（血小板輸血を行うための装置）が再稼動し始めた報告がなされた。これは2005年に寄贈されたものの、宗派対立の煽りを受けて技術者が病院を去ったために、稼動できなくなっていた。病院に残った医師が技術を習得し、08年3月から再稼働した。08年の1～3月、同病院では14名の死亡例があったが、セルセパレーターによる輸血再開後、死亡数は半減したという。

バグダッドで改善が見られる一方で、モスルやバスラでは、改善は期待できない状況だ。地方選挙を見越してか、モスルでは少数派のクリスチャンなどへの迫害が激化している。バスラでは、保健省からの薬の供給は必要量の5％に過ぎず、病院は水を確保するのも精一杯である。病棟に患者があふれ、床で寝ているような状態は改善されていない。

JIM―NETでは、薬の支援を、主にチョコレート募金でまかないながら、学術的な協力を信州大学医学部などと進めていくこと、セルセパレーターの消耗品などは、ジャパン・プラットフォームの民間ファンドなどに協力を要請する。

「2年前、マージン医師は、自分たちは、タイタニックに乗り込んだ楽師のようだ。沈んでいく船で演奏するしかないと言った。今回、その船は、沈没しそうな状態から持ち直し、少しは前に進めるようになったと思う。私たちは5年間支援を続けている。同じ船に乗っている。これからも同じ船に乗り続けるだろう」と佐藤JIM―NET事務局長が締めくくり、今後はより包括的な支援を約束して閉会した。

Chocolate for peace!

限りなき義理の愛大作戦09が始まります！

佐藤真紀（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

「私にもできることを具体的に教えてください！」講演会などで、よく聞かれます。

イラクのがんの子どもたちを助けようとしたなら、医療支援が必要。つまりはお金が必要です。

ＪＩＭ―ＮＥＴが、イラクに送り届けた医薬品の金額だけでも、４月～９月の半年で１４２０万円でした。下半期も同様の金額が必要です。

そこで、私はこう答えます。

「バレンタインにチョコレートを食べてください！」

「んん？？」

チョコレートを食べるだけで、医療支援ができるの？

ＪＩＭ―ＮＥＴが毎年六花亭と作っているチョコレートは、イラクのがんの子どもの絵をすてきにデザインしたもの。５００円募金してくれた方に、１袋お渡ししています。図柄は全部で４種類。

つまり、このおいしくてかわいらしいチョコレートを食べたなら、それが医療支援になるというわけ。

サマワに咲く花

パッケージの絵には、ＪＩＭ―ＮＥＴが支援するバスラの院内学級の子どもたちの絵を使っています。

院内学級では、闘病している子どもたちがたくさん絵をかいていますが、中でも目を引くのは、サマワというところから通っている白血病のハウラ12歳。赤い花が咲き乱れる不思議な木の絵に、とてもインパクトがありました。彼女の絵の中には、同じ赤い花が、地面に生えているものや、切花にして花瓶に生けたり、女の子がプレゼントに花束を持っていたり、コーヒーカップのデザインになったりしています。

「どうして、花の絵を描くの？」と聞いたところ、「だって、イラク中にお花が咲き乱れるとすてきでしょう」といっていました。ハウラの心の中には大きな赤い花の木があって、彼女はその花をいつもみんなにあげたいと思っているのでしょう。「プレゼントです」といってまた、たくさんの花の絵をくれました。

大きなハウラの花の木から、つんだ花をチョコレートのパッケージとしてみんなに広がっていく。そんなイメージで配色を換えて４種類のデザインができたのです。色もやさしく癒されるかんじで、ちょっと大人っぽいです。

サマワはどんな町？

ハウラの暮らしているサマワは、ちょうど5年前の1月、陸上自衛隊が派遣された場所として、日本では有名になりました。日本政府は、サマワでの復興支援を、ＯＤＡと陸上自衛隊の活動は「車の両輪」として、約２００億円のＯＤＡ予算を、自衛隊派遣費７２０億円をかけて実施するという方法をとりました。

しかしこの中には、がんの子どもたちの支援はふくまれていません。

サマワには病院がないので、ハウラは朝5時に起き、バスラまで4、5時間かけて通院します。サマワの道路は細く、荒れ果てたままです。そこをスピードを飛ばして車が行き交うので事故も多く、先日もハウラと母親が乗った車が後ろから追突されました。幸いかすり傷ですみましたが、病院での検査の時間に間に合わず、泊まるホテル代もなく、ＪＩＭ―ＮＥＴのスタッフのイブラヒムの家に転がり込みました。

やっと病院にたどり着いても、薬だけでなく、清潔な水も電気も十分にありません。

ＪＩＭ―ＮＥＴでは、ハウラのように、通院するお金も払えない患者の経済支援も行っています。

ハウラと家族

イブラヒムが、サマワを訪問しました。「サマワの人は、日本の支援に感謝していました。そして、自衛隊がイラク人を殺さなかったことを評価しています。でも、彼らは、民間企業がもっと入ってくることを期待していたので、がっかりしている人もいます。仕方がないのかもしれませんが、5年も経って、サマワは忘れ去られた町になっています」

ハウラが通っている学校ものぞいてみました。ハウラは本来小学校6年生

ですが、闘病のため2年間、学校を休み、08年の9月から4年生のクラスに入っています。教室は天井が壊れていて、ぼろぼろ。教室も狭く、ぎゅうぎゅうづめですが、それでも彼女は学校に通える喜びをかみしめています。

サマワは劣化ウラン弾が使われた町です。サマワでもがんが増えている理由として放射能汚染が考えられます。

２００３年、米軍警察官としてサマワに派遣されたハーバート・リード軍曹は、わずか1ヶ月の滞在で劣化ウランにヒバクし、体調不良を訴えています。

リード軍曹らが寝泊りしていたサマワ列車修理場が、劣化ウラン弾で破壊されていたことが後で明らかになりました。彼が修復作業をしていたサマワの刑務所の壁にも、無数の劣化ウラン弾による弾痕があったといいます。

「サマワの子どもたちは、何も知らずに、劣化ウラン弾をつかんだり汚染された戦車に出たり入ったりして遊んでいた。危険だとは知らず。私たちには、そういった戦争の犠牲者すべてに責任がある。正当な理由もなくイラクを侵攻し、危険だといわなかったのですから」

そして、彼は、日本人とともに、子どもたちの医療支援のお金を集めたいと申し出てくれました。

今回、ハウラのほかにも、卵巣がんで死ぬ直前に絵を提供してくれたハニーン、脳腫瘍のイラフという腕白少女の父、ヨルダンで暮らすイラク難民の小学生たちも絵を描いてくれています。

ハーバート・リード氏（左端）

キャンペーン中にはいろいろなイベントも計画しております。

ぜひ、チョコを食べながら皆さんと一緒に平和を考えましょう。

■　限りなき義理の愛大作戦 2009　■

年が明ければもうすぐバレンタイン！
ＪＩＭ―ＮＥＴはキャンペーン期間中、1口500円の寄付をしてくださった方に、イラクの子どもが描いた絵を使ったチョコパッケージのお返しをします！パッケージの中には、北海道の六花亭のアーモンドチョコが入っています。
イラクの白血病の子どもの薬代は1日約400円、1口のご寄付500円から経費を引くと、白血病の子どもの1日分の薬代になります。
前回は、電話がつながりにくい、チョコレートの発送に時間がかかるなど、数々の不手際があり、多くの皆さまにご迷惑をおかけいたしました。今回は受け付けや発送の体制を見直し、皆様のご要望に迅速に応えるべく準備作業を進めてまいりました。

イラクの子どもたちのために、皆さまのご協力をお願いします。

■ チョコ募金は、2009年1月5日より電話とファクスで受け付けます。
- ● 電話　：　03 － 5816 － 3721（10時～ 19時）
- ● Fax　：　03 － 5816 － 3723（24時間）

※4口（2千円）を1セットとし、セット単位で受け付けます。
※ 申し込みセット数に関わらず、一律100円の配送手数料をいただきます。

▼ 同封の「限りなき義理の愛大作戦 2009」のちらし裏面は、ファックス申込書としてお使い下さい。

◎用意したチョコレートが無くなり次第、キャンペーン終了とさせていただきます。お早めにお申し込み下さい！

●「限りなき義理の愛大作戦」についてのお問い合せ先
ＪＩＭ―ＮＥＴ東京事務所
〒171-0033　東京都豊島区高田3-10-24　第二大島ビル303
電話 03-6228-0746
eメール　info-jim@jim-net.net

ベラルーシの食卓

寒さに向かってお魚スープ＜ウハー＞

雪の便りが聞こえてくると、お鍋がグツグツ、コトコトとおしゃべりを始めます。冬野菜のうまみが出て、お肉でもお魚でも、薬味をくふうするとこれだけで十分です。

ベラルーシでは、ブリオン作りも、全部自家製でした。豚を殺し、ニワトリをつぶしていたブジシチェ村のおじいちゃんやおばあちゃんの顔が浮かんできます。

今回、あえて材料は魚でと思うのは、わが身の行く年を感じるからでしょうか。日々身体のケアにも心がけなければと思いつつ、来る年を迎えます。

＜材料＞（4 人分）

白身魚または生サケ　3 切・玉ねぎ　1 個・ジャガイモ　2 個
月桂樹の葉　1 枚・塩　小さじ２～３・コショウ　適宜　・香草（ディルなど）

＜作り方＞

1 . 鍋に水 10 カップを入れ、魚を入れて弱火で 30 分位煮る。
2 . 玉ねぎは、薄くスライスし、ジャガイモは角切りにする。
3 .1 に玉ねぎ・ジャガイモ・月桂樹の葉・塩・コショウを入れ、やわらかくなるまで煮る。
4 . 器に盛って、ディルを散らす。

モスクワ便り

11 月 14 日から 16 日までモスクワで第 42 回日本映画祭が開かれました。

3 日間の映画祭で、新作映画 8 本を含む、観客を十分満足させるプログラムが準備されました。

この中には日本では有名でも、ロシアではほとんど知られていないアニメ映画『ドラえもん のび太の恐竜』がありました。日本外務省は、青ネコのドラえもんを史上初めて公式に《アニメ文化大使》として任命しました。今年の春、日本の高村正彦外務大臣は、ドラえもんに任命を再確認する公式文書を手渡しました。《アニメ文化大使》は、日本の文化外交の一環として、在外公館等が主催する文化プログラムです。それは、外国で人気のある日本アニメを上映し、日本への興味を高めるために日本文化について知識を広めることが目的です。

『下妻物語』は、ロシアのポスターで、『カミカゼ　ガールズ』と名づけられていました。モスクワの観客は、この作品を観て、たとえば、《ロリータ》と《暴走族》のような、日本の若者のサブカルチャーについてとても興味を持ちました。わが国の人々はこれまで、日本は先端工業国で、古い文化を持ち、豊かであでやかな中世のお祭りがあり、女性は着物を着ていると思っていました。それゆえ、多くの観客達は、最近のお人形のように着飾ったロリータたちを見て、まったく予期せぬことと、ショックさえ感じました。

モスクワでは日本映画祭以外にも、最近の日本文化を紹介するさまざまな催し物が開かれています。2008 年 11 月とても面白い《日出ずる国》絵画展がありました。2008 年日本の広告写真展、オリエンタル美術館では日本芸術についての連続講座もありました。

イリーナ・ニコラエワ（モスクワ事務局）

他者と出会う

NO.34

宮尾彰

はじめて会ったとき、Nさんは真っ暗な八畳間の真ん中で小さなこたつに足と頭を入れ、背中だけをこちらに見せてうずくまっていました。黄色のTシャツは汗でべたべた。髪はモズの巣のよう。世話人がいくら呼んでも、食事の席に加わろうとしません。返ってくるのは、『でたらめだ。くそったれ！』の罵声のみ。

その日、私は女性の知的障害者三名が暮らす共同住居の当直見習いとして、その古い民家を訪れたのでした。

食事の時間以外、彼女は何一つ無い部屋に豆電球だけ点けて、昼夜を問わず芋虫のように丸まっているのでした。ここでの生活はもともと彼女自身が望んだものではなく、それまでずっと同居していた高齢のお姉さんの都合による措置でした。彼女はそれを飲み込めないまま、少しの荷物と一緒にこの民家での生活を余儀なくされていたのです。

そんな彼女にどうやって近づいたらいいのか、かいもく見当もつかないまま、週に一回、私は当直勤務のお手伝いを始めました。

深夜になると、彼女は獣のように吼えました。どこにも片付けようのない気持ちをうめき出すことでしか、夜の闇と静けさに耐えられなかったのでしょう。男性の当直者が求められたのも、二人の同居者が怖がって、もう何日も眠れずにいたことが原因だったのです。

夜半に二階の別室で寝入っている年下の女性を布団から引きずり出して巻き添えにしようとする彼女を、どう抑えたらいいのか、私は毎回途方に暮れました。

「Nさん、おじゃましてもいいかい？」

何回目かの夜、私は彼女がもぐり込んでいるこたつに足を入れました。別の側で私も畳に横になり、何も言わずにただ黙って同じこたつにあたっていました。

沈黙の内に一時間ほど経ったところで、

「…それじゃあ、おやすみ。風邪ひかないようにね」

「……おやすみ」

柱時計の音だけが聞こえる部屋で、ようやく関係が成り立ち始めたのです。こうして本当に少しずつ、こたつでの会話は増えて、数ヶ月後には、ある一定の時間を横で過ごすことで彼女は静かに朝までいられるようになりました。

他者を迎え入れること、それは他者を「われわれ」のうちに併合することではない。すなわち、他者をサプロプリエする（s'approprier＝同化する、専有する、横領する）ことではない。それはむしろ、自己を差し出すことであり、その意味で他者とのぬきさしならぬ関係、関係が意味を決めるのであって〈わたし〉が関係の意味を決めるのではないような他者との関係のなかに、傷つくこともいとわずにみずからを挿入してゆくことである。

鷲田清一『「聴く」ことの力』（一九九九年）

Nさんのこたつにこちらが入れてもらうことで、なぜ彼女がそこから出ようとしないのか、どんな気持ちで過ごしていたのかに、遅まきながら思い至りました。

或る認知症ケアの専門家のふくよかな表現を借りれば、これが「相手の世界におじゃまする」という過程なのです。できるだけお年寄りの徘徊に付き合って歩きまわる内に、ぽつりぽつりと相手が語り出す言葉からその理由が見えてくることがあるのだそうです。

他者と出会い、他者を迎え入れることは、予測のつかない、手探りの道行きに他なりません。

往々にして私たちは、「自己を差し出す」のをおそれ、相手との関係を自分の思い通りに支配しようとします。

沖縄や従軍慰安婦の存在がこの国に問い続けているのも、「他者と出会う」経験の欠如ではありませんか。

АНЕКДОТ

◆Решили русские любители рыбалки бороться за то, чтобы рыбную ловлю признали олимпийским видом спорта. Устроили соревнования, пригласили экспертов из Международного олимпийского комитета.
-Ну что,-спрашивают их,-убедили экспертов в том,что рыбалка может быть олимпийским видом спорта?
-Почти,-говорят рыболовы.-Осталось только доказать,что водка-не допинг.

◆Факты из исследований здравоохранения в США.
а)Японцы употребляют в пищу очень мало жира и страдают от инфарктов гораздо меньше англичан и американцев.
б)С другой стороны,французы употребляют в пищу много жира и тоже страдают от инфарктов гораздо меньше англичан и американцев.
в)Японцы пьют очень мало красных вин,и имеют меньше инфарктов, чем американцы и англичане.
г)Итальянцы употребляют огромные количества красных вин,и тоже имеют куда меньше инфарктов, чем англичане и американцы.
Вывод:Ешьте и пейте что вам угодно.Все ваши проблемы-от английского языка.

ジーマの

ロシア小話

◆ロシアの釣りアマチュア達は、魚釣りをオリンピック・スポーツとして認めてもらうように戦うことにしました。釣り大会を主催し、IOC の委員を招きました。協議の後
――どうですか、IOC の委員を、釣りがオリンピック・スポーツになれると十分説得できましたか？
――ほぼ説得しました。一つだけ、つまりウォッカがドーピングじゃないことであると、証明することが残っています。

◆アメリカの保健省調査より
a）日本人は殆ど脂を食べておらず、イギリス人とアメリカ人に比べて、心筋梗塞を起こさない民族です。
b）他方、フランス人は脂を沢山食べているのに、イギリス人とアメリカ人ほどの心筋梗塞を起こさない民族です
c）日本人は赤ワインを殆ど飲まない民族であり、イギリス人とアメリカ人に比べて、心筋梗塞を起こさない民族です。
d）他方、イタリア人は赤ワインをたっぷり飲む民族であるのに、これもイギリス人とアメリカ人に比べて、心筋梗塞を起こさない民族です。

結論：飲みもの、食べものはどうでもいい。あなたの全ての問題は、母国語が英語であることにあります。

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート――

振替用紙のメッセージから

◎一日も早くイラクの子供たちに平安が戻りますように。

◎暑さにびっくりし、豪雨に驚いた今年の夏、秋が来てくれました。体が動きます。四季のある日本のありがたさ、あなたをはじめ私達のまわりには懸命に世のため人のため働いていられる方々が沢山おられるありがたさ、ありがとうございます。

◎チェルノブイリで困っている人々の為に役立てて下さい。

◎私は小学校3年生の女の子です。みんなの病気を治してあげて下さい。お小遣いを貯めたお金の一部を送ります。

◎鎌田先生のいのちに対する運動に賛同と未来に向けて人々の平和の大切さを祈ってやみません!!

◎気持ちばかりですが孫と一緒に。役立てて下さい。

◎ささやかですが…。

◎先日、プラネタリウムで、ある科学者が「1年間世界中で戦争をしなければそのお金で宇宙エレベーターが開発できるのです」と言ってました。そんなすごい事ができる程、戦争でお金を使っているのですね。そんなお金があるのなら病気で苦しんでいる子どもに送ってほしい!

◎子どもたちに明るい未来と希望がありますように。

◎継続は力なり

◎チェルノブイリで苦しんでいる人々のために、役立てて下さい。

◎思うところあり、送金いたします。

◎かつてのチェルノブイリ救援活動でみんなから預かったものの一部です。

◎今年もあと2カ月余、自然も人間界も激動の日々でした。植物さんたちは定められた働きをあわてずさわがず黙々と果たしていました。花はみごとに、実はつややかにその生きる姿にはいつもながら脱帽です。

◎人類のために力を尽くして下さり感謝申し上げます。私も孫達の未来が明るいものである様に、ほんの少しの気持ちを寄せさせて戴きます。平和を願います、心から。

◎あの事故からもう22年、でもベラルーシの人々にとってはまだ22年…。この苦しみはいつまで続くのでしょうか。一日も早く、一人でも多くの人々が救われますように。

◎平和な世の中になりますようにと祈ります。

◎今まではできる時に心ばかりの寄付をお送りしましたが、今回初めて、息子と私から会費をお送りします。

◎がんばって下さい、会報楽しみにしてます。

◎チェルノブイリ、イラクの医療支援のために役立てて下さい。

◎ありがとうございました!「寄付欄」で昔の教え子の名前を見つけました。これで2度目です。嬉しくて便りを出しました。彼は東京で外科医をしています。いつかきっと彼をゴメリに連れ出したいと思っています。

◎立冬。寒くなりました。紅と白の山茶花のこぼれ花びらが芝生の緑の上に散って、なかなかの風情です。冬には冬の美しさが数々あって、そのけなげさ、一途さに励まされます。

◎生きるということに真正面から向き合って下さることに感激、鎌田先生はじめスタッフの暖かさに力を戴きました。先日豊島区公会堂で先生の講演を伺いました。愛のある世界になりますように祈っています。

◎チェルノブイリで困っている人々のために役立てて下さい。

◎希望の灯を絶やさずに燃やし続けましょう!!

◎皆様の尊いおはたらきに感謝です。些少ですが心いっぱいありがとうを!

◎ささやかですが、役立てて頂ければと存じます。

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

関わり続けることで、より良い関係を！

ＪＣＦを支えている理事さんは本当に多彩で個性豊かな方ばかりです。

今年はＪＣＦの運営に関して理事さん達と話し合う機会が多く、チェルノブイリやＪＣＦへの思いが深いことでかえって活動について意見の違いが明らかになり、紛糾する場面もありました。その取りまとめ役として苦労を買って出て下さったのは阿木幸男理事でした。阿木さんはどんな時でも、いろんな意見を隔てなく聞き、出口の見えない局面でも諦めずに、いつも前向きで、決して否定的に物事を見ません。

この阿木さんのスタンスはその肩書きの「非暴力トレーナー」と関係があるのでしょうか？　阿木さんのお話を聞きに上京しました。

大学や予備校での講義で忙しい時間をぬって、新宿の喫茶店でお話が始まりました。

阿木さんの生き方を決定付けたのは、早稲田大学のキャンパスで目にとまった１枚のポスターだったそうです。

機動隊の警備下の受験大学ではない場所で入試を受け、合格後も１ヶ月以上の自宅待機を経験して始まった大学生活のなかでは、今、世界に何が起きているのか、安保やベトナムについて考えざるをえませんでした。

自治会活動にも参加しましたが、そこは縦割り社会で１年生は命令に従う駒として扱われ、キャンパス内のセクト間の対立や抗争に疑問を感じていました。

そんな時、「思想、信条、宗教を越えてより良き社会の建設を！　フレンズ国際ワークキャンプ関東委員会」という１枚のポスターに出会ったのです。

『ワークキャンプ』という耳慣れない言葉に新鮮な魅力を感じて、山梨県塩山の天使園でのワークキャンプに参加しました。20人あまりの大学生が手弁当・寝袋持参で参加、下草刈りや施設の修理やペンキ塗りをしました。

１週間のワークキャンプ中、作業は自主的な分担で強制は一切無く、昼間は肉体労働、夜は今起きている社会の問題について語り合いました。

キャンプが終わってみんなと別れる時、なんとも言えない寂しさを感じました。まるでもうひとつの「家族」と出会った思いだったのです。その後はワークキャンプに没頭する学生生活を送りました。お互い助け合って何かを作り出すワークキャンプのボランティアを経験したので、大学を卒業しても、自分が心から求める職がなかなか見つからず、アルバイトをしてでもワークキャンプを続けたいと思っていました。ある出版社でしばらく働いたのですが、果たして何が本当にやりたいことなのか、と自問自答の日々でした。

そんな時に早稲田時代の友人のアメリカ人と再会します。久しぶりに再会したチャックはやりたいことを見つけて、以前よりさらに活き活きとしていました。

彼らの誘いで「非暴力トレーナー」研修プログラムに参加するため、ぎりぎりの往復渡航費を手に、１９７２年に渡米しました。

絶対非戦主義を唱えるクエーカー教徒が中心になって創設した「ライフセンター（１５０人程の非暴力で社会変革を目指す生活共同体）」「アメリカン・フレンズ奉仕委員会（ＡＦＳＣ）」のワークキャンプにも参加しました。ワークビザをとっていないので、正規の仕事はできず、ベビーシッターのバイトで生活費を稼ぎました。食事は自炊し、移動はすべて自転車。でも充実した毎日でした。そうしたなかでアメリカの反原発運動にも出会います。

カリフォルニア州デレイノでの労働

カンボジア農村中学校前で（右から２人目）阿木さん

条件改善ストライキ中のメキシコ系とフィリピン系の農場労働者を支援するワークキャンプでは、こんなこともありました。

10日間のキャンプが終わった後、ストライキ支援のオフィスが何者かによってダイナマイトで爆破され、1人のメンバーが亡くなったのです。その時、リーダーのシーザー・シャベスは農業労働者とサポーターに抗議の断食をするように呼びかけました。いかなる暴力行為にも決して屈しないこと、非暴力こそ我々を勝利に導いてくれると説き続けたのです。数日後、真夏の太陽が照り輝く太陽の下で行われた葬儀には、フォークソングの歌手、ジョーン・バエズが参列、スペイン語の歌を捧げました。

その後フィラディルフィアに戻って経験をつみ、何事もまずは1人で始めることだと自信も深めていきます。

フィラデルフィア・ライフ・センターでの研修を終えて帰国しましたが、アメリカで学んだことを日本で生かすためにも、自分がもっと深く理解して自分の言葉で伝えられるようになりたくて、（食べていく見通しは全くなかったのですが、それでも良いから自分が本当にやりたいことをやろうと）アメリカに2度目の渡航をしました。

阿木さんはＳＩＣ日本支部の事務局を担当しながら「プロジェクト・アメリカ１９７６」（自転車による大陸横断ツアー）のコーディネーターとして準備に関わり、この旅にもコーディネーターとして参加します。

この過酷な旅で、自分たちの自身の存在、関係そのものを平和的にすることの困難さをいやというほど味うことになります。ツアー呼び掛け文の中で「平和」や「非暴力」を口にし、阿木さん自身「理念」として持っていたものが、グループ間の悪化する人間関係の中で、もろくも崩れてしまうことを何回となく体験したのです。相手を肯定するより否定し、問題の原因を相手の中に求めて非難してしまったり、辛くなってグループを離れていくメンバーを引き止めることができない自分。言い争いに疲れきり、もうお互いの顔を見るのもたくさんという思いに

非暴力
著者：阿木幸男
発行：現代書館
定価：1200円＋税

沈む日々もあったそうです。自分とは何か、人間とは何かを考えたその時の体験が、今の阿木さんの淡々として諦めず、みんなを抱えていく大きさの下敷きになっているのでしょう。

多くの体験を積んで30歳で日本に帰国しましたが、就職口がありません。身体を使った仕事をしたいと、ガソリンスタンドで面接を受けたこともあります。正直に経歴を話すと、「なぜあなたがここで働きたいのかわからない」と言われ、過激派か何かだろうと疑われ、就職を断られてしまいました。

１９７０年、第1回国連軍縮会議で原水禁の通訳として働いたのがきっかけで、国際会議を4年ほど手伝います。社会党の職員として働いて欲しいとも誘われましたが、組織の中に組み入れられるのはいやで、あくまでもフリーランスでの仕事にこだわりました。

アメリカでは70年代の始めに環境問題、原発問題で地元を中心に非暴力の原発反対運動が生まれます。運動そのものが非暴力で、特定のリーダーをおかず、みんなで話し合って進めます。女性が中心となり、活動の中では日常の細々としたことも、性で差別せずみんなでやります。社会全体では男性社会であるアメリカにあって、いい運動を作っていくために日常も大切にしていて、それがとても新鮮でした。

日本に帰ってきたら市民運動がアメリカと違う。組合が中心、古手がリーダー、年功序列。それが当時の日本の反原発運動でした。それを変えていきたいと思いました。

組織の中で、問題や意見の相違を話し合って、何かを変えていこうとすると、一人ひとりの価値観が出て、拒否反応も出ます。それを変えることは時間がかかって難しい。それぞれに違うバックボーンがあり、自分なりの気持ちいい見方があり、気持ちいい進め方があるのです。普段は見過ごされることが、何かで歯車がかみ合わなくなると、違いが明確になり問題が紛糾します。

通訳の経験を生かし英語で食べていこうと決心した阿木さんは41歳で予備校講師の仕事をするようになります。

同時に翻訳家としてもデビューします。翻訳家としてはまったく素人だった阿木さんを、高木仁三郎さんが「核文明の恐怖」（岩波書店）の共訳者に選んでくれたのです。その仕事がきっかけで、英語のプロとして仕事が入るようになり、脱原発運動では約20年間高木さんと行動を共にして、多くのことを学んだそうです。

「ボランティア研究全国集会」のつながりでＪＣＦに参加。講演会や報告会企画で活躍、２０００年にベラルー

2000年ゴメリ円卓会議で司会をする阿木さん

シのゴメリで行われた「円卓会議」の司会も務めて下さいました。

阿木さんは10年ほど前から大学と予備校で「世界と日本」（国際ＮＧＯの可能性）、「人間関係論ゼミ」を担当しています。

大学では阿木さんのように「無名」で、大学院卒でもなく、論文も無い市民活動家は賃金ランクが最下位なので、予備校とかけもちせざるを得ないとか…。かつては予備校では講義に直結しない話をしても、受講生もよろこんで聞いてくれたのですが、最近は英語以外の話をすると「あの講師は英語と関係のない話をする」とか「政治的な話や、原発反対について話した」と受講生が事務局に抗議するそうです。

阿木さんは「カンボジア教育支援基金」の理事でもあります。阿木さんとカンボジアの関わりについてお聞きしました。

１９８６年にピースボートに講師として乗船、ベトナムに行きました。学生の頃にベトナム戦争があり、その後のベトナムはどうなっているか見たいと思ったのです。以前ハンセン病の取材で出会った筑紫哲也さんと報道カメラマン石川文洋さんも乗船していました。ベトナムの隣国カンボジアでは、ポルポトの大虐殺で２００万人も殺されたという情報があったのですが、当時その情報を朝日新聞の本社デスクは半信半疑、日本政府もポルポトを支持していました。石川さん・筑紫さんがとにかく行って実際に見てみよう、とソ連の軍用機をチャーターして、40人集めて現場に行きました。そこでおびただしい人骨を見て、虐殺の事実に直面しました。

その後ベトナムを出て太平洋を航海中、海上でボートピープル22人を救援するという事件にも出会いました。

１９９２年、ＰＫＯ（国際連合平和維持活動）法が成立したのを機に「生徒を戦場に送ってはならない！」のかけ声で、予備校の教師仲間と「予備校教師の会」の結成に参加します。93年にＰＫＯでカンボジアに派遣された自

衛隊の活動の現地調査とカンボジア民衆の実情を知る目的のスタディツアーを企画して、予備校の卒業生を連れてカンボジアを訪問しました。

殺戮現場、荒れ果てたぼろぼろの校舎、子どもたちが地べたに座って本を読んでるのを見て、「自分にできることはないか」と自問しました。

帰国後、「自分のふるさとに学校を作りたい」と訴える元カンボジア難民コン・ボーンさんと知り合い、それをきっかけにカンボジア教育支援基金の活動に参加、カンボジアの学校建設に取り組みます。

日本からの支援で学校ができても、いろいろな問題が次々に起きます。

カンボジアの農村社会では、最初関わった頃の物々交換経済から貨幣経済に移行し、コン・ボーンさんも村に残る若者を育てることから、しだいに大学に行くような優秀な生徒を育てることを目指すようになりました。

カンボジアにも塾ブームがおこり、学校の建物を使って教師が生徒からお金をとって塾を始めたのです。塾に行って学校の教師から問題を教わる生徒は試験の成績が良くなるので、進学して都会に出たいと思う子どもが塾に行きたいと思い、教師もバイクやテレビを買うためにお金が欲しく、「収入をあげてどこが悪いのか？」と言うようになりました。

現地の実情を見て、教師と話し合いを重ね、阿木さんはこう提案することにしました。

「授業の後、補修授業をして下さい。補習授業にはお金を払います。ただし特定の生徒ではなく全員に補習をして下さい！」

それでも塾の方がもうかるので、簡単には解決しないのです。何度も現地に足を運び、時には酒を飲みかわし、「子どもを育てる仕事に誇りをもって欲しい」と話をすると、教師も少しずつ変わっていきます。

校舎や教科書をプレゼントしてそれで終わりではダメで、プレゼントしたテキストがどう使われているかを、き

カンボジアの高校生と

ちんと調べ現状を知ることが大事です。そういう現状を知らなくてはいけない。そんなふうにきちんとチェックをしていくことで、支援のお金を大切に使ってくれるようになります。働きかけることでそんなふうに変わっていくことが面白いのです。本音でぶつかれば本音が返ってきますよ。

失敗だったのは、最初の数年間は、コン・ボーンさんや校長だけと話をして現場の教師と話し合う機会を作らなかったために、本当の問題が見えてこなかったことです。今では教師とビールを飲みかわし、「みなさんはこの村をどうしたいんですか？　カンボジアではもうかる職業（銀行、商社、貿易）が偉いという意識が強いけれど、でもこんないい環境で、お金では得られない、いい暮らしができていることをよく見て下さい。自分が作った野菜や美味しい水で、美味しいものを作って食べるのは素晴らしいことです！」と話します。

今では自然なものでいいものがいっぱいあることに気付き、「田舎はいいな」と思う人も少しでてきました。

現在のカンボジア政府にもポルポトとつながりがあった大臣もいたりするので、過去の独裁政治、虐殺の歴史は高校の教科書にもほとんど載っていません。子ども達に過去の歴史がきちんと伝わっていないのです。またアンコールワットのような文化を知ることも大事なので、今年初めて高校3年生の修学旅行を企画しました。最初、引率の先生が10人も名乗り出て、危うく生徒がバスに乗れなくなるところでした。

生徒が虐殺現場で熱心にノートをとっているのを見て、頭でなく、目で見て感じることの大切さを思いました。こうした体験はきっと子ども達の考え方に影響を与えると思うのです。

都会に出るのが初めての子が半分で、みな都会にあこがれていました。でも行ってみたら空気が悪く、うるさい。物が高い。プノンペンでは水はミネラルウォーターを買わないと飲めない。

都会に行ってみて、川の水も飲めるような村の生活の良さを実感したようで、最後は生徒たちは「早く村に帰りたい」と口々に言い出しました。

こういう企画は政府の統制もあるので、学校側は取り組みにくいのです。だからこれからも日本人サイドから、修学旅行を提案して続けていきたいと思っています。

阿木さんの夢は、この修学旅行の他には、非暴力平和隊（http://www5f.biglobe.ne.jp/~npj/index.html）の活動を広げていくことだそうです。

ぐじゃぐじゃになった世の中の問題を、市民の力でほどいて、どんなふう

に人と人との信頼関係を作り上げていくかを考え続けたい。いっしょにやっていくことが楽しい関係を築き、関わり続けることで、変化が生まれると思うのです。

20代で経験した人との関わりの失敗からから学んで、今の自分があります。

一回限りの人生だから自分で楽しまないと…。大変なところにいると、逆に生きる喜びがあるんです。あまりにも楽でお金もあって…、では深い喜びもないでしょう。

2000年ベラルーシで（右から）阿木さん、コトフさん、鎌田理事長、シュミヒナ医師

人と人はぶつかるものです。でもそこを乗り越えればいい関係ができると信じます。仏教的な言い方で言えば、縁があって出会った、その縁を大切に、いい縁、いい関係にするためにどれだけ努力するか。どこまでいけるかわからないけど信じてやっていかないと何も生まれない。そう信じないとそうならない、良くなると信じて努力すれば少しは良くなる、すこしでも変われればいいんです。

誰も信じなければ、ものごとは実現することはないでしょうから…。

しばらく前、阿木さんがカンボジアから帰った直後に事務局に来て下さったことがありました。

ナップサックからくしゃくしゃのビニール袋を取り出した阿木さんは、まるで手品のようにその袋から蘭の花を何本か取り出しました。そして事務局スタッフ一人一人にプレゼントしてくれたのです。

「一人暮らしの母が花が好きでね、旅行に行くと必ず花をお土産に買うんですよ！」

ニコニコ顔の阿木さんと華やかな蘭の花は不思議な取り合わせでした。

そんなロマンチストの阿木さんにはきっと素晴らしいロマンスのお話があるに違いないのに、布山は不覚にも今回その方面のお話を伺うのをすっかり忘れてしまいました。

阿木さん、今度は阿木さんのロマンスと、なかなかの歌い手だというブルースを、是非聞かせて下さい。

（事務局・布山）

こんにちは！

Здравствуйте!

松本市立筑摩野中学校職業体験学習で
チョコ詰め作業ボランティア

★11月18、19日の2日間、松本市立筑摩野中学校2年生3名が、職業体験学習先としてＪＣＦを選び、事務局で「限りなき義理の愛大作戦」のためのチョコ詰め作業に協力してくれました。
事務局長からＪＣＦの活動について説明を受けた後、チョコ詰め開始！
コロコロとよく笑いながら、あっと言うまに作業の腕を上げ、丁寧で素早い仕事ぶりに事務局一同、感謝の2日間でした。
感想文もしっかりと書いて下さったので、ご紹介します。

今までこの団体の存在すら知らなかったけれど、今回事務所に行けて良かったなと思いました。
チェルノブイリの原発事故は少しは知っていたけれど、いまだに多くの子ども達が白血病などに苦しんでいるなんて知りませんでした。イラクでも同じような子ども達がいる事も知りませんでした。今回知ることができて良かったです。
チョコキャンペーンとＪＣＦの関係も分かって、ここがすごく立派な事業所だと思いました。本当にここに来られて良かった。ありがとうございました。

福海 麻里子

2日間という短い中で、良い体験をさせて頂きました。日本チェルノブイリ連帯基金ってなんだろうって思っていたけれど、説明を聞き、人のためにしている活動っていいなと思いました。
想像していた作業は、チョコレートのカードを自分で手書きするのかなと思っていたので、最初びっくりしましたが、チョコレートを袋に入れる作業はとても楽しく、手が止まらない位でした。
これからまだまだチョコレートの袋詰めがたくさんあって大変だと思いました。頑張ってください！応援しています。

福島 ゆかり

最初「チョコレートをカウンターに並べたりする仕事かなぁ？」と思っていたら全然違いました。いろいろ説明して頂いて、思っていたより楽しそうだなって思いました。
やってみたらすごいハマっちゃって楽しかった。やればやるほどイラクの子どもの命が救われると思うと、余計に手が進んで、この仕事をやってみたいなと思いました。
他の人は自分の将来に関係する事業所に行ったのですが、私は関係するところがなかったので、何となくこの事業所を選びました。でもやっているうちに、この仕事に興味を持ち、今やっている１つ１つが人のためになるということをここで学ばせて頂きました。
また来てお手伝いしたいと思っています。ありがとうございました。

武田 桃子

ゆるす言葉

ダライ・ラマ 14 世

Book

［本文より］怒りや憎しみでは、問題を解決することはできません。それらを解決できるのは、思いやりと真の優しさによる癒しだけなのです。世界平和を持続するための手段は「思いやりによるゆるし」しかない――そう私は思うのです。（ダライ・ラマ14世）

ゆるす言葉
著者：ダライ・ラマ 14 世
写真：野町和嘉
発行：イースト・プレス
定価：1200 円＋税

メメント・モリ

藤原新也

Book

本書は25年間の長きにわたりロングセラーを続けてきた。この25年間さらに悪化の一途をたどっている世の中に生きるための座右の書として、より研ぎ澄ました強固なものにしようと、著者はある写真や言葉を葬り、ある写真や言葉を産んだ。21世紀エディション、改訂版『メメント・モリ（死を想え）』が新登場した。

メメント・モリ
著者：藤原新也
発行：三五館
定価：1800 円＋税

罪と罰 1

ドストエフスキー

Book

さきに刊行された『カラマーゾフの兄弟』が5巻累計100万部のベストセラーとなった、亀山ドストエフスキーの第2弾、『罪と罰』（全3巻）が刊行開始された。ドストエフスキーの代表作のひとつ。歩いて七百三十歩のアパートに住む金貸しの老女を、主人公ラスコーリニコフはなぜ殺さねばならないのか。ひとつの命とひきかえに、何千もの命を救えるから？

罪と罰 1（光文社古典新訳文庫）
著者：ドストエフスキー
訳者：亀山郁夫
発行：光文社
定価：819 円＋税

聖地感覚

鎌田東二

Book

［あとがきより］わたしは本書において、「聖地感覚」という切り口から、未来の人類の生存にとってわたしが大事だと考えている「生態学的身体知」の一つの在り様を探ろうとした。そのような感覚価値を身体知として受肉し、応用し、さまざまな生活のかたちにまで及ぼすことができなければ人類の未来は危ういと思っている。（鎌田東二）

聖地感覚
著者：鎌田東二
発行：角川学芸出版
定価：1905 円＋税

日本石巡礼

須田郡司

Book

本書は、フォトグラファーであり「石の語りべ」の活動をしている著者が、2003年から06年までの3年間、日本中の石を求め訪ねる旅「日本石巡礼」を行って出会った石たちを紹介している。信仰の対象として祀られている石、古くからの伝説がある石、新しい伝承が創られた石、森の中でひっそりと佇む石……。日本各地の「石の声」を聴き、いにしえからの基層文化をたずねる旅の記録。

日本石巡礼
著者：須田郡司
発行：日本経済新聞出版社
定価：1300 円＋税

月曼荼羅

志賀 勝

Book

著者は1997年から月暦（旧暦）カレンダー『月と季節の暦』を制作・発行している。神話や科学、フォークロアや歴史、宗教や芸術など、太古から現代にいたる月と地球上の人間のつながりを一望する月尽くしの逸話集。月に関わる書名索引、人名索引、事項索引を充実し、月のデータブックとしても利用できる。「月のマンダラ世界」への入門書。

月曼荼羅
著者：志賀 勝
発行：月と太陽の暦制作室
定価：2000 円＋税
問合せ：http://tsukigoyomi.jp/

壁画洞窟の音

土取利行

Book

パーカッショニストで、古代音楽研究家である著者が、南仏の旧石器時代の壁画洞窟内での演奏体験から、故郷・四国のサヌカイト（讃岐石）の謎解きまで、最新の音響考古学や認知考古学の知見を踏まえ、古代音楽の豊饒な世界を甦らせる探求の成果。壁画洞窟内での演奏を収録したCD『瞑響・壁画洞窟』（日本伝統文化振興財団）も同時発売された。

壁画洞窟の音
著者：土取利行
発行：青土社
定価：2200円＋税

カスピ海の花

セヴダ

CD

セヴダは、〈カスピ海のビリー・ホリデイ〉とも評される、アゼルバイジャンの国民的スター歌手。『カスピ海の花』は、アゼルバイジャンの伝統歌謡〈ムガーム〉の伝統を受け継ぎながら、ジャズ・フレイヴァーを取り入れた現代的な〈ムガーム〉をうたったアルバム。

カスピ海の花
セヴダ
発売元：オフィス・サンビーニャ
定価：2625円（税込）

クイーンズ＆キングス〜ワイルドで行こう

ファンファーレ・チォカリーア

CD

本作は、今年10月に来日公演をした、ルーマニアのジプシー・ブラスバンド、ファンファーレ・チォカリーアの5枚目のアルバム。マケドニアのスター女性歌手エスマをはじめ、ルーマニア内外の20名以上のミュージシャンをゲストに迎えて競演したアルバム。

クイーンズ＆キングス〜ワイルドで行こう
ファンファーレ・チォカリーア
発売元：ブランクトン
定価：2520円（税込）

テル・テイル・サインズ

ボブ・ディラン

CD

約半世紀にわたり活動を続け、ロックの時代を作り、時代を変革し、様々な人びとの人生に影響を与え続けている、ボブ・ディランの通算45作目となるアルバム。『オー・マーシー』（1989年）から『モダン・タイムス』（2006年）まで約20年間の未発表曲や別テイク、ライヴ音源などを収録。2枚組、全27曲。

ブートレッグ・シリーズ第8集
「テル・テイル・サインズ」
ボブ・ディラン
発売元：ソニー・ミュージック
定価：3780円（税込）

映画『アイム・ノット・ゼア』

トッド・ヘインズ監督

DVD

詩人、無法者（アウトロー）、映画スター、革命家、放浪者、ロックスター、実在のボブ・ディランのさまざまな人格を投影した6人のディラン。それぞれ名前も年齢も異なる6人のディランが繰り広げる6人の物語。ヒース・レジャー、リチャード・ギア、ケイト・ブランシェットなど6人の俳優がディランを演じる。トッド・ヘインズ監督、2007年作品。

映画『アイム・ノット・ゼア』
発売元：ハピネット
定価：4935円（税込）

ボブ・ディラン写真集 時代が変る瞬間

バリー・ファインスタイン

Book

「本文より」ここにある写真には、ぼくたちがたがいに抱いていた信頼や尊敬や友情が映し出されている。わたしは彼の作品が好きだったし、彼もわたしの作品が好きだった。ボブは、わたしの写真が自分を興味深い人物に見せるのを知っていた――実際、彼は非常に興味深い人物だった。そしてわたしは、天才を前にしているのを知っていた。（バリー・ファインスタイン）

ボブ・ディラン写真集
　時代が変る瞬間
著者：バリー・ファインスタイン
訳者：菅野ヘッケル
発行：ブルース・
　　インターアクションズ
定価：3800円＋税

日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）活動紹介

日本チェルノブイリ連帯基金（JCF）は 1991 年 1 月に設立されました。1986 年 4 月 26 日に起きたチェルノブイリ原子力発電所の爆発事故の放射能被災地へ、主に医療を中心として支援活動を展開しています。

支援開始当初のベラルーシは、深刻な経済状況で、白血病など病気の子ども達は、十分に治療を受けることができませんでした。衛生管理もできなかったために、多くの子ども達は感染症などで亡くなっていました。JCF は、現地の医師らと話し合いながらプロジェクトを組み、信州大学などの医療従事者と共に着実な支援活動を続けてきました。

そして 2004 年、活動の支援先はイラクへも広げられました。イラクでは湾岸戦争以後に白血病が急増しています。長期にわたった経済制裁後、新たに起きた戦争で極端に物資が不足、子ども達の治療もままならず、多くのいのちが失われています。

日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ―ＮＥＴ）

イラクにおける小児がん（おもに白血病）医療支援のためのネットワーク。医療支援を行っている NGO や関心のある医師たちが、専門性を持ち、過不足のない支援を（イラクの人々が自分たちできちんとした治療ができるようになるまで）継続的に続けることを目指して立ち上げたネットワーク。JCF も構成団体の一員。

website　http://www.jim-net.net/

◆ＪＣＦ会費振込口座

正会員年会費（1口）	１０，０００円
賛助会員年会費（1口）	３，０００円
郵便振替口座番号	００５６０－５－４３０２０
加入者名	日本チェルノブイリ連帯基金

◆ＪＣＦ／イラク支援振込口座

血液成分分析機購入、医師招聘研修、薬品購入

郵便振替口座番号	００５２０－０－８１０７８
加入者名	ＪＣＦ／イラク支援

グランドゼロ GROWING ZERO JCF

第 78 号

発行日　2008 年 12 月 26 日
発行人　鎌田 實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金
イラスト題字　貝原 浩
イラスト　樋野ひかり
小林裕子
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
森　たかの
協力　酒井　隆
寺島仁美
ＪＩＭ―ＮＥＴ
風樹光
印刷　電算印刷

■編集後記

友人からシクラメンの鉢が届いた。真っ赤な炎が踊る鉢植えを置くと、部屋が急に華やいで見える。シクラメンの和名は「豚の饅頭（ブタノマンジュウ）」と「篝火草（カガリビバナ）」の 2 種類があるとか。前者は球根、後者は花からの連想だという。1 つの植物を観てもこんなに違う言葉が生まれる。それを面白がるか困惑するか…。今年のＪＣＦは面白がる余裕のない 1 年だった。来年はいろんな人の関わりを大切にしながら、ぶれない軸をもって、豚と篝火を面白がることができる年になりますように…。　（布山）

販売物紹介

Book

・「チェルノブイリからの伝言」
ＪＣＦ 編（オフィスエム）1200 円

・ユーラシア・ブックレット No.21
「ベラルーシ 大地にかかる虹
～日本チェルノブイリ連帯基金の 10 年」
神谷さだ子 著（東洋書店）600 円＋税

CD

・「坂田明／ひまわり」
2500 円

・「坂田明／おむすび」
2500 円
JCF 理事長鎌田實が立ち上げた
「がんばらないレーベル」第 1 弾、第 2 弾

・「小室等／ベラルーシの少女」
（8cm シングル盤）1000 円

一澤信三郎帆布オリジナル鞄

☆綿帆布製手提げ鞄 A
（26 ×口元 36・底 30 × 6）　定価　4,500 円
☆綿帆布製手提げ鞄 B
（29 ×口元 39・底 31 × 8）　定価　5,500 円
☆綿帆布製手提げ鞄 C
（22 ×口元 39・底 27 × 12）　定価　3,500 円

●特定非営利活動法人
日本チェルノブイリ連帯基金（ＪＣＦ）
〒 390-0303
長野県松本市浅間温泉 2-12-12
TEL 0263-46-4218　FAX 0263-46-6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/